

Frances Christie and Joseph Hanlon,

Mozambique and the Great Flood of 2000.

Oxford: James Currey, 2001, xvi+176pp.

ふなだ
船田クラークセン さやか

I 本書の性格と著者の紹介

本書は、南部アフリカに位置するモザンビークで起きた大洪水（2000年2～3月）がいかなる状況下で発生し、救援活動はいかになされ、被災者となった住民がいかに生き延びてきたのかについて紹介している。こう書くと、本書が緊急援助のノウハウを伝えるものと受け止められるかもしれない。もちろん、本書には、将来世界のどこかで発生するであろう大規模災害の防止および救援活動のための教訓がぎっしり詰め込まれている。しかし、この本が単なる「大災害および緊急援助の一事例の紹介本」に留まらないのは、著者たちのこれまでのモザンビークとのかかわりによるところが大きい。従って、著者であるハンロン氏とクリスティー氏の紹介を先に行ったうえで、本書について詳しく検討することとしたい。

研究者でありジャーナリストでもあるハンロン博士^(注1)は、過去20年間にわたり、南部アフリカ地域およびモザンビークに関する研究を重ねてきた。その成果として、すでに5冊の本が出版されている。*Peace without Profit: How the IMF Blocks Rebuilding in Mozambique* (James Currey, 1996)/*Mozambique: Who Calls the Shots?* (James Currey, 1991)/*Beggar Your Neighbours: Apartheid Power in South Africa* (James Currey, 1986)/*Apartheid's Second Front: South*

Africa's War against Its Neighbours (Penguin Books, 1986)/*Mozambique: The Revolution under Fire* (Zed Books, 1984)である。これらの著書のタイトルからもわかるとおり、彼は、南北問題、平和、民主化等の分野で活発な執筆活動をしてきた人物である。最近の研究課題を「内戦のグローバルゼーション」としているように、「内戦と称される紛争」の根源的な要因としての国際情勢や国際的な行為体の関与に着目し、それらと内戦との関係を明らかにしようとしている。彼のこのような研究視角および手法は、モザンビーク紛争の研究の経験から導き出されたものである。

モザンビーク独立の直後（1977年）に勃発した、反政府ゲリラMNR/RENAMO（モザンビーク民族抵抗）と一党支配体制を築いたFRELIMO（モザンビーク解放戦線）との間の武力紛争に関しては、その要因をめぐって活発な論争が繰り広げられてきた。南ローデシア（現ジンバブエ）および南アフリカの白人政権の関与を重視する「外部要因」説論者と、マルクス・レーニン主義を標榜したFRELIMO政権の農村政策の失敗を重視する「内部要因」説論者との間で、紛争と同時進行で激しい議論が戦わされてきた。

ハンロン氏は、1984年、86年および91年の著書において、モザンビークで生じている破滅的な武力紛争にいかなる形でいかなる行為体（国際、地域、国内を含めて）がかかわっているのかを明らかにし、モザンビーク紛争をめぐる論争の中では、「外部要因」説論者の筆頭として位置付けられてきた。彼は研究活動の傍ら積極的に市民運動にもかかわってきたが、その彼が「外部要因」説をとるのは彼の運動家的な「心情」からではなく、史実に基づく緻密な調査、研究に基づいた結果としてのものであった。確かに、「内部要因」説論者らが指摘するように、彼の著書は紛争の「内的メカニズム」を明らかにするには不十分である^(注2)。しかし、現代、特に第2次大戦後の世界において、「外部」（国際情勢のみならず、国際機関等も含む）とされるものの「一国内の諸現象」に対する影響の大きさは増す一方であり、「国内」だけに着目していても、問題の本質は明らか

かにならないという彼の主張も一理あるだろう。冷戦が終焉した後もこの傾向は止まることなく、経済のグローバル化の進展で、皮肉にもこの傾向が加速しているのが現状である。世界最貧国、重債務国であるモザンビークにおいてはなおさらそうであり、国家内のいかなる出来事も、それがたとえ開発であろうと、紛争であろうと、災害であろうと、外部の関与のあり方が多大な影響を与えているのは事実であろう。

一方のクリスティー氏は、夫のイアン・クリスティー (Ian Christie, 故人) 氏とともに、モザンビークの植民地解放闘争期からモザンビークにかかわり、1975年の独立以来モザンビークに住みながら、モザンビーク事情を英語で世界に伝える役割を果たしてきた。そのうち、10年間は政府情報局 (AIM) で働き、時には政府に批判的な記事も世界に発信することで、モザンビークに関心を持つ人々の間で信頼を得てきた。ただし近年は、モザンビーク事情に精通した独立コンサルタントとしてジャーナリズムからは離れていたようである。

このような2人の著者にとって、17年間にも及んだ紛争から再建の道を歩み始めていたモザンビークを襲った150年に一度とも言われる規模の大洪水は、ただ眺めて嘆くべき出来事ではなかった。2人は、現場に行き、国際的な機関や要員をコーディネートし、さまざまな報告書を書き、世界に「連帯」を呼びかけた。かつて、1960年代にモザンビークがポルトガルの植民地支配下にあった頃、彼らがそうしたようにである。ここまでは、なるほどモザンビークにコミットし続けてきた外国人達の献身的で勇敢な姿を想像させる。

しかし、本書はその2人の「ヒロイックな活動ぶり」や「緊急援助の詳細」を描いたものではない。本書の特徴は、「最貧国」、「災害」、「緊急支援」、「ドナー」、「国際協力」等の人目を惹くキーワード、あるいはテレビや新聞が語るセンセーショナルな根底にある南北問題のあからさまな表出を、現場とそこにかかわる一人一人の人間の諸相から描こうとしている点である。援助される側とする側の権力関係と攻防、意思決定メカニズムの交錯、かかわる

人間の迷いや葛藤、そして失敗、モザンビークの人々の悲しみと強さ、以上のように複雑で混沌とした現場の模様を、見事に一冊の本にまとめているのだ。登場人物は、すべて固有名詞で語られ、団体や機関あるいは政府の末端者であろうと実名で記される。一人一人の判断ミスも、判断への迷いも、判断を狂わせた汚職も皮を剥ぐように明らかにされ、結局、物事を（良くも悪くも）動かすのは、人間およびその集合体であるのだということを再認識させてくれるのが本書である。具体的になぜ失敗したのか、誰がどうすれば良かったのかが明らかにされているからこそ、本書が示唆するものは多く、将来の役に立つものとなろう。

しかし、このような本を、長年に亘り一党体制下にあったモザンビークのような国、あるいは人間関係が物を言う国際機関等と深く関係しながら書き、世に問うことは容易ではなかったと思われる。本書が、「モザンビークにおける報道の水準を高めようと命を捧げた」カルロス・カルドーゾ氏 (Carlos Cardoso, 2000年10月に暗殺される) とクリスティー氏の夫に捧げられているのは偶然ではないだろう。その意味で、本書は単なる「緊急救援の一事例」の紹介でもなければ、災害現場の実態を表す記録本でもない。モザンビークという、世界でも最も貧しい国のひとつに数えられる国で、2000年という時点で何が起きているのかについて、大洪水を切り口として明らかにしようとしているのである。だからこそ、本書のタイトルは『モザンビークおよび2000年の大洪水』なのであろう。このような、ある意味で野心的な作品の成立の陰には、著者らのモザンビークに対する長年のコミットメント、史実の積み上げに対する誠実さ、確固たるスタンス、人柄が深い影響を及ぼしているのだ。

では、本書の内容はどのようなものとなっているだろうか。

II 本書の内容

本書の構成は以下のようになっている。

序章 「水は我々を追いかける動物のようだっ

た」

- 第1章 最悪に備えて
- 第2章 最悪が起こった
- 第3章 最悪を越えて
- 第4章 高地を目指して
- 第5章 混沌からの命令
- 第6章 国家統制の強化
- 第7章 テレビは早く、援助は遅かった？
- 第8章 すべての援助が有益ではなかった
- 第9章 なぜ洪水はそれほどひどかったのか？
- 第10章 人々は警報に注意を払っているのか？
- 第11章 家に戻る
- 第12章 結論

第1章から第4章までは、モザンビーク大洪水が起きるまで、起きてから、救援活動、そして人々の帰還までのプロセスについて述べている。第5章および第6章では、モザンビークと外部の援助（特に国連）がどのように援助を組織したのか、どのような問題が生じたのかについて、疑問も含めて書かれている。第7章および第8章では、この洪水に対する国際的な反応（報道や援助）について分析している。第9章では、洪水の原因を検討している。第10章では、予防や警報の重要性を指摘している。第11章では、復興について扱っている。第12章では、結論が提示されている。全篇において、そこにかかわる被災者、援助関係者、政府役人等の声をとおして話は展開していく。と同時に、専門的なデータ（気象予測、過去の災害、救援の量など）が随所に盛り込まれている。

第1章から第4章までで興味深い点は、南部アフリカ地域環境の抜本的な変化が、モザンビーク大洪水をめぐるいくつかの出来事に象徴的に現れたという点であろう。隣国の南アフリカでアパルトヘイト体制が終焉したことは、モザンビークの和平にも大きな影響を与えた。そして、1994年以来、モザンビーク政府与党（FRELIMO）の「同志」であったANC（アフリカ民族会議）が政権を担うことで、両国間関係、あるいは南部アフリカ地域全体の安定に大きな役割を果たした。その象徴的な出来事が、

南アフリカ空軍によるモザンビーク住民の救出劇であろう。かつてモザンビーク国内の武力紛争に深く関与していた南アフリカ軍の白人兵士達の「変貌ぶり」が全世界に発信され、新しい時代を印象付けた。人命救助に最も重要な「初動」の段階で、南アフリカ空軍と同様に、救出活動に乗り出したマラウィ空軍は、「アフリカ人がアフリカ人を助ける姿」を世界に印象付けるのに貢献した。

また、第1章では、今回の大洪水発生の予測に南部アフリカ地域気象観察フォーラム（SARCOF）がかかわっていたことが紹介されているが、これも新しい時代の地域協力を確認させるものである。というのも、SARCOFの母体である南部アフリカ開発共同体（SADC）の前身南部アフリカ開発調整会議（SADCC）は、アパルトヘイト時代の南アフリカの経済的支配に対抗しようとした周辺諸国が結成した地域機構であったため、南アフリカは参加しておらず、さまざまな分野でデータや研究蓄積の不十分さが問題となっていた。その意味で、1992年に新しく発足したSADCが、「南部アフリカ地域の人々が平和で、ともに生活し働くことができるための地域の団結、平和、安全の強化」という役割を十分に果たすためには、経済、科学、産業すべての分野における地域の「巨人」南アフリカの正式加盟は不可欠であったのである。1994年のANC政権誕生とSADC正式加盟以来、南アフリカは積極的に地域協力に参加し、さまざまな分野における協力が進展してきたものの、その突出した力の格差が他の加盟国との間に歪みを生み出しつつあることも事実であろう。地域協力の難しさは、SARCOFの合同気象予測会議でも明らかになる。モザンビークの代表らが大雨の予測を主張したにもかかわらず、平年を超えた雨量の可能性は30～35%までしか引き上げられなかった。これは、大洪水を招くサイクロンがモザンビークをはじめとする南部アフリカ地域を直撃する1カ月前のことであった。また、第4章では、南アフリカからやってきた援助団体が、南アフリカの旗を空港に立てることを主張し、ついにモザンビーク首相に直訴する場面も登場する。

このような「援助する側」の問題は、何も南アフ

リカに限ったことではなく、国連をはじめとする国際機関、各国政府機関、国際 NGO などについても指摘されている。特に第2章、第5章と第8章では、その問題が具体例を挙げて指摘されている。第2章では、国外から流入した援助関係者が、地元政府の計画や準備あるいは経験を無視して、自分達の計画に沿って動いたため、摩擦が生じたことが紹介されている。第5章では、洪水発生から1週間で、実に9カ国の空軍、56機の飛行機、通常の10倍の積荷、何千もの外国人がモザンビーク入りし、混乱を極めたことが明らかにされている。第8章では、特に「親切」から提供された援助物資が、現場でいかに混乱を招いたか描かれている（たとえば、水の浄化用塩素剤の代わりにミネラルウォーターが大量に送りつけられたが、輸送手段の欠如から全く配布できなかった、期限切れや処方実績がない薬剤、生鮮牛乳、生のジャガイモ、焼きたてのパンが送られた等）。物資援助は、一般市民も参加しやすい分野だけに相当の量が集まったが、配送手段の欠如や保管場所の不足によって無駄になっただけでなく、余計な混乱を招くことにもなった。輸送費から配布体制まで責任を持つような組織化された物資援助でなければ、意味がないという。また、英国の NGO の中には、資金消化だけが目的となっていた団体もあり、「48時間以内に300万ポンドを消化できるようなプロポーザルを作成するよう」本部から指令が下り現場を困らせるケースもあったという。

以上のように、緊急援助には多くの問題があったのであるが、うまくいった点も多かったという。第8章で、成功例として挙げられているのが、700人近い被災者住民をボランティアとして訓練した赤十字である。実に30万人の被災者が、その恩恵を受けたとされる。その成功の秘訣として、(1)資金が国際赤十字連合や赤新月社から素早く提供された、(2)災害救援の経験があった、(3)明確な方針が存在したこと、が指摘されている。その他、開発援助関係の NGO でも、モザンビークに根を下ろしていた団体は、地元政府機関等とも協力しながら適切な支援活動を行ったという。

また、著者らによって成功の鍵とされているのが、

モザンビーク政府に救援活動も含めた全統括責任を持たせたことである。第6章に詳しいが、通常は国連傘下に政府機関が入るのに、国家災害監督局(INGC)の傘下に国連も入ることになったおかげで、無用な重複や権限争いが避けられただけでなく、地域事情がいかされ、結果的に物事がスムーズに運んだという。第8章における「国外の専門家の中には、現地 NGO やスタッフに対する驕りや、現地に根ざした知識や経験を軽視するケースも多い。彼らはいつも時間がない。現地の目線、時間で議論する暇がない。しかし、今回の洪水支援を通じた取組みは、現地の状況をよく観察し、現場の声に耳を傾け、現地で長年活動してきた団体と国際機関、団体の双方の協力を惜しんではいけないことを教えている」というコメントは、耳を傾ける必要があろう (p. 104)。

また、第11章では、国際会議で相当額の復興支援を約束した援助国や国際機関の多くが、債務削減や開発援助の資金を復興援助に繰り入れたため、実際の復興計画に割かれる金額は非常に少なくなったことが指摘されている。それだけでなく、約束された資金は即座にモザンビーク政府に供与されたわけではなく、引き続き援助国と個別に受け渡し交渉が行われることとなったため、実際の資金供与は次の雨季に入っても進まなかったという。

著者は、結論部分で多くの命が救われたという事実を強調している。すなわち、この洪水は、亡くなった人の数の多さによってではなく、たくさんの方が救出されたことによって記憶されるべきであるという。4万5000人という信じられない数の人々の命が救われたことは、洪水に対する備えがモザンビークにあったこと、過去の教訓が生かされたこと、そして国際的な連帯の成果であるという。

III 評 価

このように本書は、さまざまな問題を指摘しつつも、「国際的な連帯」の成果を記している。しかし、著者自らが第7章で鋭く指摘しているように、この陰には、大洪水の中、必死に木々につかまる人々の

姿がテレビで全世界に放映されたことが影響していた。モザンビーク大洪水の直前に起こったインドのオリッサ大洪水は、ほとんど報道されることがなかったために、モザンビーク大洪水の10倍以上の死者、行方不明者を出したにもかかわらず、国際的支援は限られたものであった（他方、日本においては、「遠い」アフリカの中でも日本との関係が「薄い」モザンビークで起きた大洪水が報道されることはほとんどなかった）。

この「連帯」は確かに評価されるべきものであろう。しかし、これが一過性のものであったことは、その後の世界のあり方を見れば一目瞭然である。「国際世論」、つまり北側にいるお茶の間の人々と、映し出される「被災者」の間に横たわる大きな断絶。両氏が繰り返し記述する、国際的な諸機関による現地機関の軽視。著者の心情としては、「国際的な助け合いの精神」がいかに「水物」であり、一方的なものであろうとも、あまりの貧困とあまりの大規模災害の中では、それを評価せずして後は何に期待するのだというものがあろう。しかし、大洪水と大勢の外国人と大量の物資が去った後のモザンビークでは、人々の都市への流入が進み、援助への依存と汚

職が深まっているという。本書は、大洪水発生から1年後に出版されたものであり、本書にそこまで期待することは不可能であろうが、この2人の著者だからこそ、「その後」の展開を、より広いそしてより長期的な視点に立って検討してほしいと考える。つまり、『モザンビークおよび2000年大洪水のその後』の発表を待ち望みたい。

(注1) BA (MIT), PhD (Tufts), Research Fellow in Development Policy and Practice Discipline at Open University.

(注2) この論争については、拙稿 [船田 1998] を参照されたい。

文献リスト

船田クラークセンさやか 1998. 「モザンビーク紛争研究の問題と課題——ニアサ州マウア郡における調査に基づく一考察——」『アフリカレポート』No.27.

(津田塾大学大学院国際関係研究所研究員)